

## 貸貸物語 (八)

### 三回離婚した女

小野 友貴枝

(一)

難なく離婚する人が多くなっているとは言っても三回経験者に会った時、大沢未知子は内心びつくりした。そしてその手続きはさぞ面倒だろうと思った。

どんな夫婦でも、いや女性なら一度や二度、離婚をしたと思うのが普通ではなかるうかと思うのだが、多くの女性(妻)は、「でも」と思つて、離婚に踏み切れていない。その中には、「子はかすがい鎚」という通り、それは愛情面ばかりではなく、養育の責任や経済性でも片親になることの難しさは伴うので、離婚に至らないことが多い。それが大方ではなかるうか、それなのに、偶然出会った女性は、三回離婚して、今单身生活を謳歌している。

四八歳という彼女の雰囲気は、脂ののりをと、見る方が期待するだろうが、中年特有の麗しさを持つて気取らない。落ち着いて社交性のある言葉づかいも併せ持っている。

その麗しさは周りに理解しやすく表現すると、教養のある、凜とした、そして庶民的で、自分を語ることにも厭わない、率直さがある。物おじしない職業女性らしさも持っている。

その女性に、どこで会ったかというところ、あるレコード古物商店が兼務営業している軽食喫茶店である。そこへ彼女は、趣味でやっているコーラスのメンバーのギター奏者と一緒に入ってきた。休日には、メンバーの独りがアルバイトしているので、その日を当てにして仲間とおしゃべりを楽しみに来ている。だから臨時店員、森忠則と話す言葉も、ほとんど音楽、コーラスのことばかり。

この日もコーラスの帰りだと言っていた。一緒に入ってくる背の高い男は、タンバリンをやっていると言う。コーラスというのは大体ピアノだけの伴奏が多いが、この仲間はピアノとベースをバックに付けてもらっている。かなり専門性が高いグループのようだ。

「コーラスのレパートリーは」初対面の未知子は、隣のデスクから質問した。

「私はメゾソプラノ、昔からずっと」横長の唇を品よく開けて彼女は言った。コーラスをやる人は、だいたいの唇が発達している。どうにでも開けられるように訓

練されている。きっと彼女のコーラス歴は長いのだろう。

「私は、テノールしか歌えない」

一緒に来た首の長い背の高い男性が、未知子の方を見て答えた。肩を並べた二人が入ってきたので、仲良しなのだろう。それとも恋人かなとかんぐりしたくなる雰囲気がある。一週間前にも見ているので、憶測が働く。

この店で、今日出会う用件は、別にある。

臨時店員の森忠則から未知子が賃貸している家を、相場瑠美に説明してほしいと言われていた。貸家の状況が分かるパンフを持ってきてはいるが、それを開く雰囲気はない、コーラスの話で盛り上がっている。

森忠則はコーラス仲間の一人、相場瑠美さんの家探しの手伝いをしているというなら話は簡単だ。

なぜ、未知子の貸家の内情を知りたいと、言ってきたのか、まだ理解できていない。

「それは、僕が、店にくるお客さん、大沢さんの貸家が空いていると聞いていたよ、様子を聞いてみようか」と言ったことが原因らしい。不動産屋に行かずに、直に訊くこともあるが、未知子はしたくない、というのが本音である。

初対面の相場瑠美は、四回目の結婚をするので貸家探しをしている、この四回目という言葉に未知子は、耳を疑った、いくつか貸家を捜しまわって、大沢の所で五軒目だということかと思った。

数日後、取引先の不動産屋から、入居申込書が届いた。

契約書には、世帯主が相場瑠美になっている。平井晋也は同居人になっている。引越しの時には、未だ婚姻が成立していなかったからだという。その意味は、彼女と前夫の、高島剛との離婚が届け出されてから、一〇〇日、結婚が出来ないということになっている。実際には、遡れば一年前から破局を迎えていたが、彼が離婚届け出に判を押さなかったからだという。市役所での届け出が遅れて、実際には、新しい人との同居と転居が、彼女の移転と合わさって前倒しになった。そのぐらい彼女は、未知子の貸家が気に入っていて、一日でも早く入居したかったようだ。

未知子の方では、誰と同居しようとも、結婚しようとも関係ない、と言えた。複雑な瑠美の婚姻関係は、入居の書類には関係なかった。書類を作るのに、このち必ず結婚するという言葉を言っている。彼女から

聞く、平井晋也は未婚で、自動車メーカーの研究所に勤めていると聞けば、信用置けるので、心配していなかった。

入居の引越しを済ませた夕、瑠美と平井が連れだつて来た。新しい貸家と言っても三年前に作ったものだから、入居については、掃除屋を入れきちんと手入れしてある。いつものことだが、入居者との接点はほとんど持たずに、仲介屋が中に入っている。この仕組みを守るために、仲介屋が賃料の5%を取っている。未知子はそれでも日々のことで相談があれば乗るようになっている。

「くるみカフェではじめてお目にかかりました時から、大沢さんの貸家に入りたいと望んでいました。おかげさまで、スムーズに運べてホツとしています。本当にありがとうございます」

相場瑠美は、岩手県の出身と言っていたことを思い出せないほど、丁寧に頭を下げる、傍についてきた平井晋也も、慣れた感じで頭を下げる。

「こちらこそ、よろしく願います」とあいさつの後に、一番心配になるごみの収集場所を説明した。瑠美は、五軒の借家を作った時から収集場所は、新設することに決めていた。それは大事なことで、ゴミ出し

を組内の人と一緒にすると、賃貸者が自治会に入っていないので、差別扱いされるといふ不安を与えるので、五軒の貸家の分を新しく造設した。

ごみの処分は自治会と関係ないので、無視することもできるが、清掃する当番が回ってくるので、入居者には理解されない、それなら未知子自身がやってしまった方が早いと自分の土地に新設した。そして掃除当番もなしで、管理費も取らないという方法を取っている。できるだけ長く入ってもらった方がいいという未知子の方針である。

「よろしく願います」と瑠美は言つて、背丈のある上に底上げのスニーカーを並べて、夫婦のように仲良く帰つていった。

## (二)

ここから出勤する足柄協同病院には、交通機関は何を利用するのだろうか、駅まで車で行った方が楽だと聞いていたので、駅周辺に駐車場を借りることにする。晋也は、厚木の職場まで車で通う、今までも一つ先の駅から通っていたので、頭に時間と通い方がいいといっている。

「ねえ、駐車場借りたいのだけど、付き合ってくれる」

「そうか、車よりも電車の方が便利だけど」

「ルート246は混む。駅の近くに駐車場があると書いていたから、今日のうちに見に行つてこようかな」

「車で行く」

「そうしてくれる、私この街知っていないのだ、晋也は知っているでしょう」

「わかるよ、夜中に帰ることがあるかもしれないから、できるだけ駅に近いところがいい、すると南口の西側を捜そう。駅に近い方がいいね」

晋也は、小まめだから何でも相談しやすい。そして運転もうまい。助手席に乗つても話しやすい。

すると反射的に、前の夫のことが思ひだす。こんな対比はいけない、これからも気を付けなければ、と自分で納めた。助手席に乗つて用足しができる冥利は、しばらくなかった。いつもばらばらに生活していた。

もちろん駅前の賃貸マンションだから何を買うにも便利で、二人で買物に出たこともなかった。

駅の広場に七分で着いた。日々の駐車場が、結構あつて、一日千五百円とか一時間三百円という表札がかかつていた。そこは駅の傍で、月ぎめの所は、個人の庭先で、十台から十五台という範囲だった。やはり駅から一分でも近いところが欲しかった、晋也の直感を

信じて、農協が経営している民家が並ぶ庭先を見つけた。駅から五分と明記されている、ここならば夜中に帰つても大丈夫だ。

「今から、手続きしてしまおう」と瑠美が言うと、「一晩考えなくてもいいのか」と、慎重派の晋也が言つて、瑠美の足を制する。

そういえば、貸家を捜す時も「考えてよく考えて決めなさい」と制されたことを思い出す。しかし瑠美は、大家の未知子の言葉をすんなりと信じて、ろくに下見もしないで、ちよいちよいと決めてしまった。直感で決めてゆく、早業が瑠美の主体性というものである。彼女は思い込んだら、トントンと決めてしまふ。賃貸住宅は、瑠美が決めたとおり、いい住まいだ、これで、瑠美との結婚生活は、充実していくだろう、と晋也は帰りの車の中で、独りごとを言った。

「縁がなくて、四四歳になつてしまった。やつと一人前になれた。瑠美は四八歳で離婚歴はあるが、かえつて世の中を知つていて、付き合ひやすい。自動車メーカーの研究所の中にいたのでは、瑠美のようなおらかな魅力のある人は見つからない」

瑠美は、独りで手続きを言つて農協に寄つて帰つてくるという。今日は一日中一緒にいたので、少

しの時間、離れた方がいいのだ。今晚から瑠美を愛することができると思うと楽しみだ、彼女はどんな反響をするだろう、晋也の未熟さを笑うだろうか。

瑠美は、その点経験豊かだからいいセックスをするだろう。離婚歴のある薬剤師など世の中には一杯いる。薬剤師は、特に女性は三十%以上離婚経験者だ、やはり腕一本でしごとができるので、どこに行ってもお金に困らない、彼女はいま民間病院で働いているが、三十万円以上のサラリーを貰っているだろう、彼女はどんな高い家賃でも怖くないと言っている。規制のない生活をしたいと彼女は望んでいる。ここで借りた貸家はそれができるだろう、マンションと違って自然を取り入れて建ててある。きつと動物も飼えるのではないかな、将来が楽しみだ。許されるなら犬を飼いたい、秋田犬を。

晋也は一人になったせいを取り留めもなく、好きなことを浮かべ、瑠美との未来に、いや今晚に期待で胸を膨らませていた。確かに毎晩セックスできるというのは、何を置いても楽しみだ。そんな生活をどのぐらいあこがれたらどうか、いやそれも年上だなんて、こんなうれしいことはない、経験のある女性が晋也には魅力だ。彼女は結婚するまでは決してセックスに応じ

ないという古風な考えかたをしている、だから婚姻届を一月前にしているのに、未だセックスを許されていない。貸家で生活すると決めたベッドで晋也を迎えるつもりなのだろう、楽しみだ。彼女は婚姻という形に収まらなければ、決してセックスしてはいけないと思っている。フリーセックス、または不倫という言葉で象徴される男女関係は、彼女にとっては許しがたいものである。

晋也の夢は具体的で、もう一時間も待てないほど、気持ちが高ぶってきた。彼は、音楽、ギターを奏する割には、女性にもてない、きつと言葉がスムーズに出ないからだろう、ユーモアがないタイプと言え言え、それなのに、同じコーラスの中でギターを奏するという縁で相場瑠美と近づくことができた。彼女も楽器を持ちたがっていたが、彼はギターを勧めなかった。ギター演奏者には女性は少ない、力づくで弾くところがあるので女性は成功しない、その点ピアノは年齢性別関係なく早く覚えていく。まして伴奏をするレベルなら、コーラスをやっている人向きである。

一軒屋根の下で生活するということは、なんという自由で、独占力があるのだろうか、と晋也は思った。今までアパートやマンション住まいをしているので、こ

の特権階級の生活は自由で豊かなのだろう。これも平屋でなければだめだ、そして隣近所から離れているという恵まれた環境でなければだめだ、そこへ行くと、この家は隣家から五メートル近く離れているし、勤め人だから時間のサイクルも同じだ、だから音を立てても大丈夫、というメリツトの多い家である。

初めてつくる夕飯もうまくいった。瑠美は、手抜きが嫌いなのでみそ汁まで作った。シイタケで味を濃くする技は、田舎人でなければできない。大根の具は岩手県人特有のものだ。晋也は宮城県人で、大崎市の農村地帯だから田舎の味が好きだ、おかげさまで彼女の濃い味とドッキングする。結婚してよかったと思っている。彼女は年齢の差を気にしていたが、六歳の年齢差など気にしない、かえって女の方が年上であることで、初婚の男性とはバランスが取れる。瑠美は、三回離婚しているが、それは人生の助走のようなものだ。今度は仕事も大学の専門分野も違っているので、面白い、この結びつきはコーラスである。市内のコーラスグループに入っていて助かった。それだけでない平井のテノールに惹かれている。長年歌い続けている人は違う、グループの中でもリーダー格だ。

この家でも歌の練習をしたい、ピアノも習っている

ので、ボーナスで中古のピアノを買うつもりだ、その時は大家さんの許可を取る、きっと彼女はいいというに違いない。入居契約の時にも、ピアノのことは言っただけだ。

夕飯のメニューが良かったのか、晋也と瑠美はビールを半ダース開けた。もう、片づける気もなく、ベッドに潜った。

明け方起こされた、セミダブルのベッドに寝ていたので、晋也がベッドに登ってきた。この部屋は誰の部屋だったかなと思いついていた瑠美の頭に昨晚のことが浮かんできた。この部屋は瑠美の部屋で東側、晋也の部屋は西で、両方の出入りは、一旦廊下に出なければ、入ってこられない。それなりに個室の間隔を大切にしている、そして各々の部屋にセミダブルのベッドを入れて、どちらの部屋からも外に出られるように南に半間の板の間がある。玄関から入ると左手に並んでいるので、この家は東西に長い。

さて、何時だろう、と思う間もなくベッドに入ってきた晋也は、瑠美の耳に口を付けて、「おはよう、いいでしょ？」と促す。

半分開けて晋也の体と並んだ。「もう、起きなければ

遅刻する」

「そうね」と同調すると同時に彼は瑠美の上に乗ってきた。早いよ、という言葉をつきつめたときにも口も塞がれた。

(三)

それでも仕事に行く準備を整えている間に瑠美は、コーヒーとパンを用意した。しかし晋也は、コーヒーを水で薄めて飲み、ネクタイを締める時間もなく車に乗った。彼の職場は、二十キロ離れた、郊外の町にある。自動車メーカーの研究所で、仕事人間である。きつと研究が彼の生きる要求とマッチしているのだろう。瑠美は、その彼の姿勢が気に入っている。今まで付き合い合ってきた人たちの中には仕事が好きという人は少ない。薬剤師は、大まかに言うとな女性の仕事だ。製薬会社で新しい薬に取り組んでいる人は別だが、薬剤師には主体性がない、いくら医薬分業と言っても、医師のオーダーで薬が指定され、そこから一歩も出られない、言うなれば医師の指揮のもとに働く医療関係者の一員である、故に気合というものが得られない、薬に問題を見つけても、医師のオーダーが出ていけば、再確認の手続きが取れない、だから大学が六年になろうとも、

仕事の主体性を見つけない限り、四年の時と同じである。それでも事業主になることはできると反論をすることはできるが、患者に向かう薬剤師では、副作用の勉強をするだけである。そこに問題を見つけても所属している立場では何にも言えないし働き方の改善にもならない。

出かけた後の片付けもほどほどにして瑠美は、仕事に行く準備にかかった。まだ寝室の掃除が残っている、せめて掃除機だけはかけておきたい。

晋也の部屋の掃除が難問だ、彼は、やって欲しいと思うだろうか、それとも掃除など、いや自分がいない時には部屋に入らないで、と思っているかもしれない、どっちだろう。

「今朝、聞けばよかった。自分の部屋の掃除はどうするのですか」と。本当は彼の部屋に入りたくない気持ちであった。

「どうしたものでしょう」と悩みながら彼の部屋に入っていた。

「いや、まいった」ベッドの上はしっちゃかめっちゃかで、掛布団は干さなければならぬ敷布団も半分斜めに落ちている。このままにしておくことはできない。

瑠美は、今朝だけと思って、形を整えた、きつと彼は、このような生活をしていたのだろう、結婚生活が干渉し過ぎと言われないように、まして四二歳の長い独身男性では、ちよつとやそつとでは、直せないだろう、でも、この部屋でラブをしたのだから、両方の責任、思い切つて、布団を陽の射す、板の間に運んでそこで、ごみを叩いてしまおう。その方が始末がいい。ちやつちやつと並べてみた。布団は二人で買ったものだから新品であることは間違いないが、一晚の体臭、いやセックスの残り臭が広がった、まいったなど思つた。男に初心ではないと思つていたが、セックスしたあと始末まで朝にしなければならぬとは思わなかつた。晋也はきつと、瑠美が簡単に片づけると思つていないのだ。簡単にやるのはいいが、今晚怒られるかもしれない、まずシーツだけは洗濯してしまおう、と急いで、洗面所に運んだ。

時間のない中で洗濯と掃除機をかけた。夫の部屋と一緒に居間もリビングも掃除機をかけた。こんなことをしていると、勤めの時間を逃してしまふ、後二十分という時間を見計らつて、洗濯ものだけは陽だまりの板の間に干した。

瑠美が一番苦手だと思ふことは主婦になつてしまふ

ことだ、かいがいしく働く世話女房にはなりたくない、いつも朝風呂に入つてスーツを着た職業人でありたいのだ、だから化粧の手抜きはご法度だ。

ここに持ち込んだ姿見の鏡で出勤のスタイルに問題ないかどうか確認した。

「大丈夫、髪の色もよし、ただストッキングが斜めにはけている」こんな格好で病院を歩くと、すぐに冷やかされる。「おお、慌てていますね、寝坊したのでしょ」わざと新婚さんと冷やかされるのが落ちだ、気を付けなければならぬ。

バス停までは七分かかる。今朝は弁当を作らなかつたが、これからは、家で作つて持つていきたい。お弁当を持つた生活が長いので、このことは手抜きをしたくない。彼はどうかだろうか、愛妻弁当など欲しくないというだろうか、今までの結婚生活でも弁当は、欲しいと言えれば必ず作つて持たせた、そんな年上女房らしいところがあるのに、嫌となるとどうしても嫌になる、その極端なところが瑠美らしいと言えれば瑠美らしい。そして、妥協も嫌いだ。嫌だと思つたら、絶対に嫌だ、これが彼女の特徴だ。

病院についても、今朝の延長線で、落ち込んでみられず、新婚を冷やかされないように「回りの気配に



神経をとがらせていた」こんなことは、久しくなかったことで、いつもならおおぎつばで、「おめでとう」と言われれば「照れるから止してよ」とさっぱりと答えていたが、今回はそうもいかず「内緒」と指を立てて、スタッフにも触れさせなかった。

(四)

二七年前、初めて、小島圭祐と学生結婚した時のことを思い出す。

「おみそ汁はカツと、サラダ。きんぴらも買ってある。おみそ汁は具を入れ、チンすればできる。やさしいものだ」瑠美は自分に言った。

一回目の結婚では、おみそ汁はきちんと作っていた。なぜ作っていたのか忘れたが、おばーちゃんが造るもんだよと言われたので、受け売りだがそのまま実行した。圭祐は、おいしいと言ったことがあるかどうか思えない。きつと手作りの味噌汁に驚いたのかもかもしれない。そんなもの造るとさえ思っていなかったのか。ならない。なんで同棲したのか、いつも自分でわからなかったが、セックスがあるものは結婚というように思い込んでいた。誘われて興味半分で行ったが、セックスの濃密さはなく、子どもを産まないようにす

ることだけは、本気で考えなければいけないと母に教わった割には二年目で妊娠してしまった。なぜ妊娠したかも、分からなかった。妊娠するなら、セックスしなければよかつたと思った。

春のある朝、大学卒業の年だった。

「妊娠してしまったみたい」と圭祐に簡単に言った。

「何を」と聞かれた。「うん、何を、というのかな、なれんどと訊かれれば分かるが、何をと言われても困る。四ヶ月過ぎると降ろせなくなるし」

「それで、どうしたいのだ」と他人事のように聞かれた。た。

「どうしたいと言われても、自分だけの問題ではないし、あなたに相談しているんでしょ」

「だって、おまえは薬学やっているのだから、もう少しすれば、国家試験だろう、そんなときにどうしたらいいの、と聞かれても、僕の問題ではないし、あなたの問題でしょう」という意味不明の言い方だ。結婚しているのだから二人の問題だと言ったのになんというまがまがしい言い方。

「お前が考えろと言われたって、独りで考えろ、お前のことだろと言われてもね、独りの問題ではないと思っけど」

「だって、妊娠したのはお前の手違いだろう、僕はいつも避妊に協力してきた」

「それはそうだけど、独りで産むことはできない」

「いつでも協力するよ。しかし、僕は就職しているからいいが、あんたは今年、国家試験もあるし、就職しなければならぬだろう、それどうするんだ」

「就職は大丈夫、内定している、国家試験も大丈夫だろう、今までの勉強だから」

「じゃ、結婚だけすればいいんだね、いいよ。オレの子供だ、一緒に育てるよ」

「じゃアパート捜さなければ、それと結婚届けをしなれば、結婚大丈夫ね」

「うん、僕はそうだけど。どうするのだ、僕はどっちでもいいよ」と簡単に言う。

「じゃ、来週行こう、休めるの？」

「大丈夫だ、当分別居だけど、子どもの責任は僕が持つ、いい子を生んでな」

こんな会話をしたのが、妊娠が分かった時だから、二人ものんびりしていた。結婚はその年の二月二十五日、イブの後だった。予定日は三月ということで、瑠美は就職せずに、家の薬店を手伝い、まるで居候のように盛岡の自宅に居座って、妊娠中を大切に保護され

ながら生活することができた。だから、仙台のアパートにはあまりよりつかず、圭祐は独りで生活していた。彼の実家は調剤薬局店の次男だから経済的な苦勞もなくのんびりと生活していた。職場は滝沢市にあったので、通うだけで、こちらも苦勞がなかった。

同じ岩手県同志、その上、実家が薬局という環境の中で育っているの、また大学も同じという先輩、後輩という目新しくない環境、まるで兄弟のように近づいてしまった。セミナーでは「介護保険における調剤薬局の役割とネットワーク」というテーマであった。そこで知り合ったのだからこちらも新鮮さがない。

「兄弟みたいたいになれ合って、半人前の大人が子供まで作ってしまった」と瑠美は嘆いた。この子は大切にして必ず育てる、しかし、彼の負担はかけたくないから、出産した時には、離婚しようと思った。

三年間の結婚生活で、長男、綜一を産み育てた瑠美は、夫の圭祐を手放した。自分一人で育てられる、実際の育児は実家の母ではあるが、経済的な問題、母性の課題も十分に耐えられると判断して圭祐と離婚した。彼とは出来ちゃった結婚であるから、彼には罪がない、この経過は二十歳も過ぎていた瑠美の落ち度で、医学を学ぶ自分の責任。圭祐の人生を遮ってはいけない、

と思った。瑠美は自分の責任であると信じて親権を、圭祐から総一を頂いた。

薬剤師の国家資格も取れているから、どこでも働けるし、子ども一人ぐらい独りで育てる十分な経済力を持つことができる。どこでも働ける薬剤師家業、子供を一人前に出来ると信じ、彼と離婚した。

そして、二三歳の瑠美は盛岡から離れた県立宮古病院に薬剤師として就職した。駅の北側に手ごろなアパートを借りられた。駅の近くを選んだのは、週一回は、実家に預けている総一に会いに帰らなければならぬからだだった。ここから、実家まで車で一時間で帰れる、かえって盛岡にいるよりは便利だ。それだけでなく病院には盛岡の先輩が三人も働いていた。

宮古市に就職した瑠美は、学生時代の離婚にも触れず、のびのびと仕事に精を出していた。県立病院は三百五十床で、国立岩手医科大学の次に大きかった。薬剤師も十三人いて、賑やかであった。室長の他に班長が二人いた。女性が半分で、どこをとっても数えやすく、また窓口も男性薬剤師と女性の半々にした組み合わせを基本にした。カウンターにアルファベット順に薬剤が整理されていて、薬の流れは楽だった。ただ、粉薬やら錠剤を分ける機械は古いままで、手仕事が結

構ある。民間なら人員を削ってでも新しい機械を入れるのだが、当病院は、改革がされていない。その方が整理されていかもと思いい、瑠美は順応していった。

仕事中は無駄口をきかない、そして、フットワークよくする意味ですべてズック。歩幅も大きく取って、すれ違う、このパツパがいい。男性と女性はぶつからないようになっているから、安心して動ける。

瑠美は、一六五センチで背が高いが、新人なので常備薬コーナーを担当している。どんな処方箋でも読めるようになるのが、まず一歩だと先輩は言う。アルファベットが読み取れなければ、そのサツサツが滞ってしまう。高い棚にも手が届くように椅子が置いてあるが、できるだけ高い棚の薬剤は普段使わなくても済むような稀な薬にしている。ぶつかったら棚の薬が袋ごと落ちてしまうので気を付ける。瑠美は新人であるから、この薬の配置を頭に叩き込む。ジャンルとしては一応、小児科、内科、外科、整形外科、皮膚科という流れを先に覚えれば、大きな分類で仕事はできる。

薬剤の整理は、診療科の分類ですることが多い。そこからは、アルファベット順にする。処方される薬は、それほど多くないので、薬剤師の能力なら、すぐに覚えてしまう。昔なら調べたが今は調合の機能がなく、

すべて製薬会社でつくられた錠剤とか、粉末になっている。だから以前のような製剤能力は必要ない、並べたなんぼの世界である。瑠美は2年も製剤をやればどんな薬でも覚えてしまった。一番大変なのは難病、抗がん剤などの薬が有害にもなる、副作用のある薬剤は気を付けることである。であるから、薬剤師はこの薬店でも勤められる、というメリットのある職業である。それに伴う賃金も高く、生活が保証されている。このために薬剤師は他県への移動も楽で、生活、行動はかなり幅がきく。

ここで、瑠美は、二回目に結婚した横尾宜保に出会った。彼は東北医科薬科大学を出ている。

瑠美は学生時代にフランスを中心にヨーロッパへ出ただけなので、東南アジアへも行きたいと思っていたが、実行できずにいた。この職場での国外旅行には、彼女はすぐに飛びついた。例えば、トルコに行きたかった。トルコは、歴史が古く、この地を見ておかなければ、アジアを語れないように思いた。この旅行は、仕事の量が少ない九月に、という事務所の意向が示された。

このトルコ旅行が縁で横尾と瑠美は付き合うことになった。

二八歳の彼は、もともと病院よりも精薬研究所で働きたいという希望があったので、瑠美と結婚する機会に、県立宮古病院を辞めた。

そして、彼は千葉の郊外にある精薬研究所に勤めるためには、別居が条件になった。瑠美は子供の養育のためにも岩手県立宮古病院を辞めることはできなかった。毎週末、実家に通い、二泊して、綜一の面倒を見るのを生きがいにしてきた。母に預け、面倒見てもらったことが良かったのか、素直でのびのび育っていた。

瑠美は、綜一のためにも、子どもは絶対に産まないと決めていた。再婚をしても子どもは生まないと決めてしまうと気分が楽であった。結婚は好きな人が現れれば、躊躇せずに結婚しなかった。結婚しない性生活は、瑠美に取ってはあり得なかつたので、どんな場合でも、結婚できる人でなければ愛さないと決めていた、このテーマも大きかった。

横尾も千葉の市川市にある、製薬会社から毎週帰って来てくれていたが、不遇なことに、瑠美が盛岡に帰る日に合わせてしまうことが多くあり、瑠美は夫を選ぶか、息子の顔を見に行く方がいいのか、偶然だが混乱してしまった。これなら、瑠美が犠牲になって市川市へ訪ねる方を選ぶようになった。

月一回市川の夫の傍に行く、そして週末は、実家に帰って母親の役割をする、何という、ユニークな生活、この生活を二年間した。

しかし、どこかで無理をしていたのか、夫のパートナーに一人の女性の影を見るようになった。瑠美は、こんな三つ巴の生活は無理があつたことに気付いた。

盛岡へ通う生活を取るか、それとも市川の夫の傍に行くか、悩んだ結果、やはり夫との縁は、三年と短い、なら横尾と離婚すればいいと決断した。離婚歴はすでに一回ある。もう怖いものはない、と決断した、横尾も自分が欲しているのは、毎日一緒に生活できる職場の事務の人を選んでくれた。その方が気持ちに負担を感じなくて済むと、瑠美も賛成した。綜一がもう少し、大きくなって、中学を卒業すれば、母親の手を必要としないだろう、その時まで、自分の母親に依存し、そして週末は母になって育てようと決心した。

その判断が良かったらしく、横尾は、職場の人と結婚して、一児の父親になった。

瑠美は、息子に約束した通り中学卒業まで盛岡に通った。

瑠美は三六歳、急に縁談があつた。病院の歯科医師

で高島剛は、離婚歴があつた。離婚歴などには驚かないが三二歳で若い。そして、彼は瑠美を見初め、結婚するなら、彼女と決めていたという、さらに驚くのは、仙台病院を辞めて、神奈川県相模原にある国立相模原病院に異動することになって、一人で異動するのは寂しいという、理由で、一緒に働いていた、瑠美と行きたいという。一緒に行きたいために結婚するのかと思うと引つかかるところもあつたが、親しくしていた高島剛歯科医師を助けると思うならそれもいいだろうと思つた。彼は、三二歳で、歳よりも年老いて見える、ちよつと背が低いのでそのせいかと思つた。

盛岡の綜一も高校に入れたので、この縁談はチャンスかと思つた、もうそろそろ都心に近いところへ行きたいと思つていた。やがて綜一が大学に入るときには、きつと東京に出てくるだろうと思つていたので、先に、都心に近い神奈川県に就職するのもいいかなと思つた。流れ流れて、相模原の平らな土地に生活基盤を持つことは、地方で生活してきた人にはかけがえのない穏やかな生活が保障されたような気がする。そして都心の大学に入学してくれたので、息子との距離も近くなった。ときどき訪ねてきてくれる。将来就職するにもこの辺なら都心に近いので、会うことが楽になる

だろう。息子は、工学を専門にしてくれたので、母親、瑠美の専門とダブらないせい、か気が合う。母親をそれなりに尊敬してくれている。

息子と付き合えただけでも関東へ転居してきた意味がある、それだけでなく、平屋の賃貸住宅に入ることができた。

政令指定都市の相模原、そこへ、それも新築家屋に入居できたのだから、この生活は大切にしなければならぬのに、新婚生活、四年目で瑠美は、剛とぎくしゃくし始めた。剛が、歯医者であることがもたらした暴君、または瑠美が見抜けなかったアスペルガー特有の協調性のなさは、生活を共にしなければ見抜けなかったかもしれない。

結婚生活で一番怖いのは、アスペルガーの夫と結婚してしまうことだ。彼らの中に内在する精神病をなぜ見抜かないかという、彼らの高い知性にごまかせられることで、見通せないことが多い。例えばこの病気を多くの人に知らしめたのは「井上ひさし」である。

彼は、ずば抜けた文学性とずば抜けたリーダーシップと集中力を持っている。そしてこの特技は他人の関係では有効であるが、一旦夫婦という距離のない依存関係にはまるといずれも短所となって飛び出てくる。密接

な関係になると、そこには甘えが生じ、暴言・暴力で妻を抑え込もうとする。友人関係の時には遠慮していた理解できない溝、空間が生じてくると、そのストレスを一気に妻にぶつける。妻は順ずるものとして扱うので、そこには不遜な態度が生じてくる。大人しい妻なら、尊大な夫を敬い、優遇するであろうが、自立した妻では、日を追うごとに諍いが高じる、その結果、夫婦の間には亀裂が生じ、限界までくることで、離婚を避けられなくなる。

瑠美は、その轍を踏んでしまった。もう限界と思つたときには高島剛との離婚を決行した。

今回は、高島の方が希望し、協議離婚の手続きをした。幸いに共通の財産分与を持っていなかったため、諍いもなく離婚が成立した。

瑠美は三度目の離婚で、又振り出しに戻った。借家は、瑠美が継続して借りることにしたので、剛は、自分の荷物を持って出て行った。

## (五)

J A 共同病院の調剤室、一日が終わると、ほっとする。同僚は大方、駅に行く途中でちよつとと言って居酒屋に寄る。この時間が楽しい。七人のメンバーの中、

女性は二人だから、誰が欠けても困る。瑠美は、ほとんど断らない。仲間内で飲むのは、いやだという人もいるが、彼女は他の室の人と飲むことよりも、同僚の方が好きだ。同志という感じがする。

「今日は久しぶりに、相場の結婚祝いだ、でも、何度目か知らないが、姓は一度も変えてないというから分からないが、今度こそ、長続きさせたいと思っっているようだ、本人がそのように言うのだから本当かもしれない。それで、何の因果か知らない、皆さんと飲みたくないというので、場所を取った。もし不参加でも構わない、彼女はそんなことは、気にしないと云っている。

調剤室は小さな組織で上司入れても七名だ、こんな変わり種は珍しい、決してプライベートな話はしないが、男性の遍歴は多い、多いのを悪口言っているのではない、きつと彼女の中に倫理というのか芸道で言うなれば通つうのようなものを持っている。それが彼女を支えている人生観であろう、悪いと言っているのではない。きつと彼女は、道を開くであろう」

立派な意見を頂いてこそばゆい、そんな、人生があるとは、思っていない、好きなように結婚をして、好きなように離婚してきて、いつも女性だって、と力んでいたのに、これでいいかどうか迷っている。でも自

分の根っこにある気持ちを大切に生きていければ、と思う毎日である。

「でも、今朝見た夫の出勤の仕方は、私に甘えている。このまま続くようなら、どこかで話し合わなければならぬ」と帰りの電車の中で、独りごちた。

やはり、男は、結婚する前と、した後では性格が一変する。あんなだらしのないベッドで出勤するとは思わなかったし、その行為の後にも、独り眠りをむさぼっていた。瑠美の方こそ眠かった。でも風呂の準備もそして部屋の片付けも、皆彼女がした。してもらうように簡単に考えていた気振りが、家を出てゆく彼に見えた。

「困るなー、四回目の離婚は避けたいし、もう歳だから、この賃貸住宅で一生終わりたい」と独り言を言った。

素敵な空間と素敵な間取りの部屋を頂いたので、ここで人生を終えたい。自分の家などどうせ建てたつて、今の賃貸住宅程ゆとりをもって建てられない。建てた方がいい。どうせ家は古くなるのだから、自分の家でも思うように建たないし、その上古くなれば修理しなればならない。その手間暇考えれば、今の家で生

活したい。だから晋也とはトラブルをしないで長く共に生きていたい。でも子供は生むつもりはい、彼が望もうとも子供を育てられない。人生、夫婦だけで一生を終えたいと願っている。

夕方、八時ちよつと前に家に入ると、彼はまだ帰った様子はない。キッチンテーブルも今朝中途半端に残しておいたままである。

「彼は、七時前には帰ると今朝言い置いて行ったのに、まだ帰っていない。どこかに寄ったのかもしれない、ことによると飲む会があつたとか、私と同じように誘われて、いる。それならメールが入っていてもいいはずだ。電話もない、すると彼は、仕事とうそをついて飲んでくるかも知れない。私と同じように結婚の祝いをしてもらっているのかもしれない、メールでも発信できないでずる祝いの酒に酔っているに違いない、それならそれでも構わない。全部このままにしておこう、一切いじらない、寝室もそのままにしておこう」

瑠美は、キッチンだけ片づけ、風呂に入って寝た。仕事を続けることは、決して無断欠勤、無断遅刻をしない、これがコツ。だから新婚と言えども遅刻はご法度だ。

次の朝、六時、晋也がコーヒー飲んでいた。この時間は、未だ起きなくてもいい時間にしていた。なぜ、彼が早起きしたのかは、瑠美は想像して分かった。昨晚遅く帰ったので、良心が咎めたのだろう。さて、彼がなんといいのか、部屋着に着替えてキッチンに立った。

リビングには光がさして平和な朝の、そして新婚らしい空気が満ちている。

窓一杯に、朝日を受けたテーブル、妻の朝食を待っている四四歳の体力も知能も高い夫の様子を映している。妻が、エプロンして朝食の準備に入ると思っている、幸せなポーズだ。

「私にもコーヒー頂戴」急に、瑠美は声を挙げた。なぜ夫の食事を、義務のように作るのかと思つた。

昨晩は、という言葉はなく、コーヒー淹れに立った。彼は、遅く帰ったことを何にも悔いてないようだ。これが当たり前、共稼ぎ夫婦でなければ、もっと遅く帰っても当たり前、仕事をやる人ならば当然のことで、何ら問題がないことなのだ、というありふれた光景を瑠美は、怒りを抑えながら、食事の用意にも立たずに座っていた。



朝食は誰が作るのですか、誰がキッチン、風呂を、そして部屋の掃除をするのですか、と小学生のような気持ちで、居直った。たった二カ月間の結婚生活で、彼女は今までと同じリビングの模様を垣間見ている。結婚する前は、キッチンの協同作業も話し合ったはずだが、あれは他人事であったのか、今ここに五体満足、力がみなぎっている男がゆっくり起きてきて、妻の朝食をさも当たり前のごとく、新聞を読みながら待っている。

寝間着のまま、玄関を開けるでもなくテレビの前で今日の天気を見ている。恐れ入ったとしか言いようもない、どこかの旦那衆だ。

今までと同じスタイルだ。四度目の結婚でもまた瑠美は、夫の世話と、片付けに終わるのか、ここまでワンプターンとは思わなかった。

「出かけます」

そそくさと身支度を整えた瑠美は、玄関に向かった。

「ご飯は？」と言いながら晋也は立ってきた。

「小田原の駅前、モーニング食べます。パンがおいしいですよ」

「なに怒っているのか、ゆうべの遅かったことか、ゴメン、仕事が混んでいる、これからも遅くなるから、

先に寝ていてもいい、しかし腹減ったよ」

「コンビニ弁当でもどうぞ」

「何言ってるんだ、ご飯炊いてあったぞ」

「好きにして、私はあなたの世話をするために結婚したのではありません」

「なんだその言い方は、瑠美が作ると思ったから、待っていた」

こんな会話をするとお思ってもみななかった。上下関係のはっきりした、妻と夫との役割を認識した会話をするとお夢にも思ってもみななかった。

こんな結婚生活をしたくて、四回も結婚し、そして身近なトラブルで喧嘩し、それが積もって行って、二年、三年。もうこりこりと思つて、離婚してきた。その結果、岩手から、宮城、そしてここで関東の神奈川県へ。それも踏ん張つて、いい借家住まい。マンションと同じぐらいの賃料だ。そして、隣近所に音の聞こえない寝室を得たのに、何を得たのだろう。夫にかしづく結婚生活をしたいと、思つてもみななかった。こんな生活をしたくて結婚したのではない、穏やかで、夫婦平等で、愛を語れる夫婦生活をしたかったのだ。それなのに、なんというのか、未だ一か月しかたっていない。そこで、「おまえ」という呼ばれる会話はした

くない。欲していた生活のレベルとはほど遠い。瑠美は、自分が欲している生活ができると、踏ん張って結婚したのだ。それも、未婚の男性に好かれて、それなのに、結婚歴もない男性。四四の彼が、ありきたりの主夫像を演じてもらってはたまらない。妻が洗濯しているなら、夫はキッチンで朝食を作るのが順当ではないか。この二か月間は、それなりに晋也の仕事として、勤しんできたではないか、体を動かしてきたではないか、それなのに、今朝、とっておきのセックスをした朝に、居間のテーブルで新聞を広げていたのでは耐えられない。晋也は、夫の位置に置いてもらえたと、安住したのだろうか。

日曜日の朝、瑠美の引き締まった顔を見たたん、晋也は顔を窓の方を向けて、腰を上げた。今日も、秋晴れでさわやかだ、近くの小川は浅く涼やかに流れている。きつとカモがいるかもしれない。

「さて、そこまで散歩してくるか」と言ってテーブルから離れた。

「どうぞ、私はありませんで、食べてしまうけど、出来たら食べてきたら」

「そうするか、でも道路際の店は、子供向けでおいし

くない。もう少し行けばコンビニがある。そこでお弁当を買ってくるかな」

「どうぞ」と瑠美は素っ気なく言った。

「コンビニ弁当は美味しくもない。それなら冷蔵庫にあるものを造った方が早い」独り言を言っ、瑠美の同情を買うつもりだ。確かに、朝にコンビニ弁当を買いに行く雰囲気ではない。

瑠美はここで負けてはおしまいだから、じっとしていた。本当は、コンビニ弁当など買いにやらせたくない。フライパンに火を付けられ、オムレツもできる、やってしまおうかなと気持ち動く、しかし、やらないと決めたのだからやらない、今までのように妥協の産物になってしまう。瑠美は、ここぞと、テーブル席に座ったままで、テレビを観ていた。確かに、ここぞと思うときに動いてしまっは何にもならない、断然動かないことだと、先輩からも教わっている、男はすぐに妻の動きを見たがる、そして、動かない方が得策だと知る。

瑠美は、食事はどっちでもいいと決めて風呂に入ることにする。風呂だつて、昨晚の沸かし湯がまだ残っているはずだ、ゆうべ落としておけばよかったが、気が付かないふりして出てしまった。生活の出だしを三

度も経験しながら、何でこんなに分担のややこしさってなんなのだろう、紙に書いて、置かなければならない。晋也が、自分のことは自分でするのが基本で、共通の用事、キッチン、お風呂、玄関と外回り、ゴミ出し。さらに郵便物、そして回覧もあるかも、これらが自然にできるようになるには、二、三か月はかかるだろう。家事分担表、家庭の事務分担表を作らなければ、定着しないかもしれない。まるで小学校の当番表のようなものだ。しかし、結婚のはじめに、この分担を大目にすれば、今まで通り、元の木阿弥になってしまう。結局、百%妻の役割になる。これはないがしろにするから将来、妻は家事というものに多くの労力を使うことになるのだ。そしてその結果、夫に不満を持つようになる。

専業主婦が、定年退職した夫に平等感をもってあっても成功したことがない、それは当然だ、長年習慣にしていたものを、急に退職の夫に洗濯機の扱いを教えても無理だ。その延長線で、双方に不満が残り、離婚という障害に突き当たるのだ。年金者の離婚率の高さは、妻の家事の分配に失敗しているからだ。そのような悲惨さはなくとも、家の中の整理整頓がうまくいかず、混乱し不満ばかり高まるという例が多くある。

家の労働は洗濯、そして買物、掃除、または郵便物・新聞の片づけとかという単純なものばかりではなく、もっと深いものがある、隣近所の付き合い、ボランティア、そして旅行など趣味の付き合いがある。もっと深く日常的で、この問題も大きな分野を占めるものにセックスがある、この役割認識も大切で、夫が勝手に決めるものではない。これがうまく機能しないから、夫婦の役割はごちゃごちゃで、何年か後には、夫婦喧嘩の元になるのだ。

「うちの夫は、三十センチ先の物も取ろうとしない、私が取ってあげないと怒る」こんな単純な生活さえ、夫婦のトラブルのもとになる、いかにも純日本的だ、それまで妻は、夫に頼まれれば、いや頼まれていなくても黙って取ってあげていたのだ、それなのに、夫婦の年数がたつにしたがって、物を取ってあげるか、あげたくないかが、喧嘩の元になっていく。

### (六)

三回離婚の経験者、瑠美は、いつも思うことでは、「はじめの一步」が大切だということを学んできている。初めに中途半端にするから、特に女性はサービスをとする傾向。これを称して母のように、という形に

なつてその奉仕を大事にしてきている。

炬燵に入った夫が五十センチ離れている新聞に手が届かないと、妻に頼む人になつて仕舞う、だから妻側からは、「腹が立つ」という怒りが爆発する。

その原因を作つてしまい、そのあげく、「離婚します」と叫んでしまふのだ。

母の代のような、男と女の役割を意識した朝の言葉を彼から聞くとは夢にも思わなかつた。なんというオソドックスさ、それも話し合う時間のない時に訊くとは思つてもみなかつた。寝不足で、テーブルに付く晋也の顔も見たくない、瑠美はバス停に走つた、別に走らなくても間に合うが、無性に腹が立っていた、又離婚したくなる予感を捨てるように、走つた。

病院は、駅から一五分の所にあるから、八時に降りれば遅刻しない。スタツプも、七人いる。中どころの共同病院、二百五十床だから十分である。組織は、どこにでもある班長がトップで、瑠美は再雇用なのでどころである。

駅から走り加減にして職員専用の裏口から入つた。この裏口から入れるのが気に入っている。誰にも見られないと思つていると、靴脱ぎ場で、昔、盛岡の同じ病院で働いていた診療内科の赤間ケースワーカーに会

つた。

「おめでとう、結婚したのですつて、年貢の納め時かな」

「その覚悟だけど。どうかしら。国粹主義者だから分らない」

「何が国粹主義者なのよ、男に虐げられるのが嫌なのでしょう。みんなで応援しているから、実験台だと思つて、頑張つて」

「何が実験台よ、一度ぐらいの結婚で、男のワンマンさがわかるもんですか」と胸の内で言つて、決して好んで結婚したわけではないのよ、とごちた。

「結婚したいと、矢の催促だから、しょうがないからしたというのに、なんとしたことか」

廊下を総務室まで並んで歩くことになる。赤間主任などに話せない言葉が一杯ある。今朝の現状も話したいが、それを言うと、自分が情けない、自分が貶められているようだ。

二階の廊下で別れた。赤間主任も離婚経験者だといふことを聞いて知つている。彼女となら話を通じる。この同一感、間違いない。

「夕方コーヒー飲まない、いやビールがいいね、駅の南、ロータリーの左側に「カド番」という居酒屋があ

るから、そこで待っています」

了解と言つて、瑠美は、赤間主任と別れた、こんなに簡単に話し相手が見つかるなんて、それもケースワーカーだ、嬉しい。

夕方、居酒屋に落ち着くと彼女から、第一声が出た。

「あなたは不倫ができないからいけないのよ。病院では、皆結婚前に不倫しているわよ、昔からあるでしょう、足入れ婚とか言うの、それで嫌になれば別れてしまふのが当世の女性たちの生き方も」

「それはできない、私は結婚していない人とのセックスはできない、だから逃げる、すると彼らは追いかけてくる、じゃ、結婚しようと。よほど私が潔癖な人に見えるのでしょうか」

「それ純粹でなくて、何なの」

「エーと説明出来ない」

「でも、結婚前にはセックスしたくないのは、正直なところね」

「普通は、そうじゃないよ、結構、早くから体で付き合っているよ」

「じゃ、結婚しなかったらどうするの、相手をペテンにかけたということね、でしょう」

「そうよね、現実路線で言わせてもらうと、結婚して

からの男の態度は、ほとんど男女平等とはほど遠い」

「でも、表面は、そうだけど、もつと奥が深いのよ」

瑠美は、しみじみとため息混じりに言った。

「これに躓くともつと悲惨よ。結婚などしなければよかったと、後悔するときがいち早く訪れる、その時はもう遅い。中身が見えてきて、立ち直れない」

「何を言おうとしているの」

「普段のことではなく、もつと想像していたよりもひどいのは、夜のことです」

「どうして」

「はじめっから、ですが、一方的。飢餓感なのか、毎晩求める、その行為は、自分だけ良ければいいというありようで」

「彼に教えたら。妻が高まるまで待つてほしいと」

「とんでもない、そんなこと言えるわけないでしょう。グーグー眠ってしまう。せつかくいい部屋を借りたというのに、ひどいものですよ、いつも自己中で」

「例えば、テクニクのこと？」

「そこまではしゃべれない」。

「いや、女性が高まることさえ知っていない、入れればいいと思ってる」

「もつと具体的には」

これほど具体的な説明はない、いわゆるだからここで絶望する。そして夫にこの言葉が通じなければ、ここで離婚しようと、きめる。

「しかし、離婚するのも大変、この説得が大変なの、夫は、なぜ不手際なのか解らない、理解していない。回数に拘るだけで、十分尽くしていると思っっている。何が不足だということを知ろうとしない、回数だけで、そのセックスのありようが男女平等であるのかどうかも知ろうとしない。女がそのことに目覚めているのか、いや毎晩することを欲しているのかさえ知ろうとしない。そんな勉強不足の男性では性は成熟しない。だから、離婚などという大それたことを考えてしまう」と主張する。

瑠美が、いくら性のデリカシー、いや女性感情を訴えても、「やってあげればいいんだろう、という返事。それには手抜きがないという」

夫婦なのに、手抜きがないとは恐れ入った言葉だ、とんでもない男性にやってもらっているんじゃない。夫婦ともに快楽を追求する作戦、一緒に楽しむものなんだということ、四四歳の男に教えなければいけないというのか、情けない。

「言い分をきちんとやって、話さなければ、離婚でき

ない」

「しかし女性側から見れば許しがたい、もし許して彼の性行為が直ればいいが、いつものパターンで、治しがたいと持論を持つていくだけでは、どうしようもない、

「だんだん嫌になって離婚の手続きは難航して、しいには家裁に持ち込んで協議離婚になるが、その原因は当事者間しか分からないので、時間がかかる。夫も引かないが、私も引けない」こんなつもりで結婚したとは思っていないので、分かってくれるまで、粘る。

結婚への道のりよりも離婚の道の方の方が大変で時間がかかる。どうして、結婚前にセックスをしなかったのだろう、二、三度付きあっておけば、独りよがりのセックスはしなかったろう、自分だけが高まればいいと思うセックス感がはびこっている、女性も高まる機能を持つていることを知らないのだ。

瑠美は、学生時代にこの学問を学んでしまった。その実験台が、学生結婚をした小島との三年間である。薬理学の中で、二人は性を学びそして互いに実験台となり、成熟していった。しかし、彼とは別の意味で離婚の因子を持つてしまった。それは、結婚生活とは関

係なく、彼は、実家の薬剤店を継がなければならなかった。親は、実の両親ではなく、父親の弟で、養育者だったので、後継ぎを求めていた。薬剤師の妻を娶るだけででは解決しない同居が条件であった。岩手県という純粋な日本人の男尊女卑を持つ国であるから、今さら性の改革はできない。妻は、元氣な子供をたくさん産むことを求められたのだ

(七)

新しい貸家の生活で、平井晋也との生活が順調にいくかと思つて時に、彼のワンマンさに出会つてしまった、男性優位の性生活が、ワンパターンで決まつてしまった。瑠美は解決策はないものかと焦つた。だつてもう絶対に離婚しないと決めて職場も近くの病院の薬務室、そこへ通う中で、話の分かる赤間紀子に出会つて、朝夕おしゃべりが出来るのに、何でと言いたくない。ケースワーカーの彼女と付き合うことで、離婚という修羅をくぐらなくても済むかもしれないと喜んでいたので、うっかりすると彼女は、この半年後、他の協同病院に転勤になつてしまふかもしれない。彼女が職場にいなければ愚痴を言える人がいない。また、独りになつてしまふ。

駅前の薬局の二階が居酒屋になつてゐる店で彼女を待つていた。夕方は、少しづつ早くなる。未だ、明るいうちに瑠美が先に来て週刊誌を読んでいた。今日は、ゆつくり聞いてもらおうと待つてゐる。そして昨晚のことを思い出してゐた。

夫の方が何を考えたのか先に帰つてゐた。

「どうしたの」と訊くと、「たまにはな」とおどけた雰囲気で答える。

「食事を作らうとしてゐるんだが、何をどうしていいのかわからない、ご飯のスイッチ入れておいた」と

と言つてテレビを觀てゐる。

「急がなくてもいいけど一通り、私がやること見ていてよ」

傍に来て、と頼んだが、彼はテレビが面白いのか、デスクから離れない。料理など関心が無い、関心が無い人に、何を教えても無理だ。

「いいよ、私がやるから、風呂と洗濯物は畳んでおいて。また、郵便物を見て、そして、コンビニで買い物をしてきてくれるかな」と頼んだ。コンビニは歩けば一五分の所にあるから、彼に頼めば自転車で行くだろう、往復二〇分だと、腹積もりで計算した。

彼は、背が高いので、歩くのも、自転車も速い。二

十分後には晋也と一緒にビールが飲めるとウキウキした気持ちで、サラダと豚のバター焼きを大目に焼いて待っていた。

三十分待つても晋也は戻らない、もう少しと思って、瑠美は風呂に先に入った。彼女は、風呂が好きだ。中でもご飯前に入るのは贅沢だと思いが好きだ。いつでも食べられるように、食器を揃えて、風呂に入った。

彼は突っ掛けで出かけたのだから、それほど遠くへ行ったわけではないのに、帰ってこない。風呂から上がった、瑠美は、食事を始めた。

テレビが九時のニュースをやっている、これを彼と一緒に見られるなど久しくなかったので、いい時間になるだろうと見ていた。しかし、彼は帰ってこない。

それで、どうしたの、と赤間紀子から聞かれた。

「うーん、いうのも恥ずかしい、彼が帰ってきたのは十時」

「どうして」

「本当に、どうしてでしょうね、コンビニで、職場の同僚に会ったのですって、そこで一杯やろうと近くの居酒屋に入ってしまった」

「じゃ、電話があったでしょう」

「それがね、携帯持たずに出たので、家への電話もできなかったと」

「待つ方は、ばかみたいよね、それでどうしたの」

「一人で食べて、寝ちゃったわよ、暇じゃあるまいし、待つていられない、本当にバカみたい」

「何時に帰ってきた」

「十時よ、七時に出て三時間も飲んでいた。こちらは事故でもあったのかと心配し、その上に、酔っぱらって帰ってきて食事はいらんですって、まったく」

瑠美は、いつも下駄を履かされるこんな生活虚しさを味わっていた。なんでこんなにポタンのかげ違いのように期待が外されるのか、きつと彼は家庭生活を軽く見ているのかもしれないと思えた。

「そうね、彼は初婚だから無理はないかもね、きつと妻と食事してもつままない、と踏んだのかもしれない」

赤間ケースワーカーは、人を見るのは早い、子どものない家庭で、妻と一緒にテレビを観ながら食事しても面白くも何ともないと踏んだのだ。本当に友達とコンビニで出会ったのかどうかわからない。それよりも、どこかで飲んだ方が面白いと思っただろう、きっとそうだ。普通の日仕事と言って、ましてサービスマンは夕方の時間が取られる、そんな家庭生活、たま



たま早く帰ってきて、妻のサービスをしようと思った。だからそれに熱中すればよかったのに、夕飯の準備などできそうもないことだ、出来たらやらない方がいい、期待されても困る。子どもでもできれば、それはそれなりに家事の分担はこなさなければならぬが、大人の大人が揃っておしやべりすることもないだろう。まして好き合って結婚したのだ、大きな必然性は、セックスだ、そこには意義がある。今までも四四歳まで、ずっと禁欲してきた、もう、結婚でオープンだ、好きなだけやらして貰おうと、離婚歴のある女性と結婚できた、一目で惚れた、それは彼女のセクシーさに惚れたのだ。若い子がセクシーさを露出度で、異性の眼を惹きつける、あのテクニシャンとは違った奥のある挑発さだ、毎晩でも抱きたい。そして子供を産んでほしい、独りだけでもいいから産んでほしい。二十歳の若い子たちのように話をたくさんして理解を深めようなどという、ロマンチックなことは考えていない。やれるだけやりたい、それには、瑠美はいい。経験を積んでいけるし、性の喜びも知っている。それだけでない、男性の急所を知っている。今晚もゆつくりと楽しませてもらうおう、そのためにも、テレビを観ながらの食事など面白くもない、出来たら避けたかった。

たまには、家庭サービスが必要だ、今晚その手があったが、幸いに逃げる事ができた。

水割り三杯のウイスキーで酔った頭が、既に瑠美を欲しがっていた。だから、友人とコンビニの傍の居酒屋で飲んでしまったことは予定外で、瑠美を怒られていることなど思いもよらなかつた。また、コンビニに来た用事もすっかり忘れていた。

## (八)

その夜、晋也は、瑠美の部屋をノックした。先ほどの酔いを醒ましてきたのか、一風呂浴びた後なのでローズの香りがする。瑠美は浴用剤はケチらない、資生堂のドゥーエを使う、洗浄効果もしっかりだが、洗った後にさわやかな香りがする。

晋也が、バスローブだけで部屋に入ってきたときは、目を開けて彼を迎えた。必ず来るだろうと思っていたので、セミダブルの半分を彼に開けた。身長一七八の体に惚れて結婚しただけあって足が長い。

瑠美の体を覆っていたタオルケットが剥がされ、彼の強い脚は瑠美を跨いでいる。いい雰囲気だなと彼女は思った。ストレートな体系よりも彼女の皮膚感覚を呼び覚まして欲しかった。舌、指を柔らかくそれでい

て強く嘔む。どこが急所か知って欲しい愛撫で、下にさがってゆく。脇腹背中がたままない、と思ったときに、彼は、瑠美の臀部迄捉えて、彼女の中に挿入してきた。「だめだ、もう限界」と唸る。

瑠美は、何が限界よ、ここまで騒がしておいて、しかし、発した言葉は、「マッテ」であった。

「もう少し、待って欲しい」

「待てない」と言つて彼は果てた。彼の性急さに唖然とした。ナニコレと思つた、瑠美にちよつと火を付けてこれから粘膜を通して、背中、そして胸というように上がってくるエクスタシーをどうするのよ、とないものねだりをするように悶えた。

隣で果てた晋也を揺さぶつて起こした。

「自分のベッドに行つて」と。

「ここにおいてよ」と瑠美の乳房に手を当てて頼む。

「シャワーにあてて眠りなさいよ」と促した。

「うん、そうする、お休み、良かった」と訊いて、ドアから消えた。

「何を良かったつて、そんなに女の体は単純でない、何よ少年みたい、役立たず」

と怒りたい気持ちをこらえていた。

「途中で、眠れやしない、これから、どうする」

瑠美は、枕を寄せたが眠れない、「シャワーを浴びよう」とドアを開けた。

晋也は、バスタオルを下半身に充てて、キッチンで水を飲んでゐる。肩の張つた、背の真ん中にある窪み、背骨の反りもいい、抱かれた満足感はいまいちだったけど、長いだけが取り柄の男の裸は、何とも言えない魅力がある、スカートとしてほればれする。特に、セックスした後の体は、見ているだけでもいい。男は自己満足するためにセックスしているのかもしれない。女性の評価など期待してないのだ。あるとしたら、反応だけであるう、感じてくれる反応だけで、体の開きなど関係ないのだ。過敏に高ぶる反応に自己満足するだけで、後は野となれ山となれに等しい。

瑠美は、傍によつて、晋也の背筋を指でなぞりたい衝動にかられ、なぜか、抑えるものがあつてその場を離れた。ここで、なれなれしく、彼に寄りかかり過ぎだ。まだ一歩も二歩も、彼の秘中に入るのは危険だ、もう少し、彼を観察してからでも間に合う、初めからなれなれしくしない方がいい、もっと熟知してからでもいい、その結果でも動けるゆとりが必要だ。彼を褒めれば、自己を顧みずもう有頂天になってしまう。今彼を有頂天にしてしまうと危険だ、この先の付き合い

で自分を見つめることを忘れてしまうから。このセックス感を控えめに言ったおく方がいい、と瑠美は自分を抑え、風呂場に入った。

その後は余韻を確かめることもなく、別々の部屋で眠った。

「おはよう」、という挨拶が晋也の方から出た。キッチンのテーブルに陽が射して新聞が読める。気持ちよさそうに片手でコーヒーを持ち上げた、彼に、「私にも一杯」と彼に甘えた。

「なんだ呑むのか」と彼は、重々しく立ち上がった。

「いつ起きてくるかわからなかったもので」と独り言を言った。

「ありがとう」

瑠美は、コーヒー湧く時間もどかしく、冷蔵庫を覗き、目玉焼きを作った。朝の定番、大きなロースハムは二枚。そしてインスタントのスープ。後は野菜をと思ったときに晋也の好きなアスパラがなかった。

朝の一時、晋也は、七時半に車で出勤。瑠美は七時の電車では三つ先の駅まで、そこから歩いて一五分の共同病院に入る。仕事には慣れたが、夫婦の歩み、習いはなかなか大変だ。いくら結婚には慣れたと言つて

も、別の人だから、一から十までやり方が違う、今回は、その上、新しい借家に決め、地域に親しむというサブタイトルがついた。さらに職場にも友人ができたし、今回の結婚生活は、長続きしてほしいと願っている。三度離婚してはいるが、決して離婚するまで、自分が離婚するなどということを思ってもいない。結果が出て、初めて結婚というものは、他人の結びつきなのだということ知らされる。

別れても何にも残っていない。まあ、子どもでも生まれていれば別なのだろうが、一度目の結婚では男の子を生んでいるが、学生結婚だったために母親が面倒を見てくれている。

二度目は、もう子供は生まないと決めての結婚だったから、離婚が楽だった。仕事を辞めるのに似ていた、すっきりと全部捨てて、自分だけ残る、というそんな感じだった。もちろん三度目の離婚は仕事まで辞めてしまった。なんか遠い所へ行きたくなった感じに似ている。遠くに行くのに、仕事も夫もおいてゆくといい感じはいいものだった。すべて置いて、故郷の土地迄おいてきてしまった。岩手から、縁があつて神奈川県の大山の麓、伊勢原市という土地に來た。ここは先輩もいたからできたのかもしれない。

職場が見えてきた。五階建ての病院、ベッド数二百五十床。先輩のついでで入ることができた。給料も経験加算をしてくれたので、いい待遇だ。

いつものように病院の裏口、職員の通用口から入ろうとすると、明間ケースワーカーに会った。

「早い出勤ですね」

「家を出るのが早かったのかしら、私はいつも通りだと思いましたが」

「ポーと考えることしながら歩いてたのじゃないですか、後ろからついてたけど声を掛けなかった、いや掛け難かった」

「考え事をしていたのは確かです。結構悩んでいることもあるので」

「エ、相場さん見ていると、悩みなど無縁のように思いますけど、即実行型で決めたら動かさないと」

「うん、それは言えてるかも、特に結婚においては、現代っ子でしょう、くちやくちや考えない」

「どうして、なんか特別な秘策でも」

「そんなものない、ただ母親を見ていて、がっかりしたことがある。夫、私の父親が浮気をしているの、分からなかった。私は知っていた。なんと人生、勿体ないことしているのだろうと」

「なぜ、もつたいない？」

「だって、一生と決めた結婚でしょう、浮気されたら、結婚解消すればいいでしょう、離婚などそれほど大袈裟に考えなくても」

という瑠美に、明間ケースワーカーは、そそくさと「そのことは時間のある時にね」と言って庶務室に入っていた。庶務室の真ん中に出勤簿が置いてある。そこで判を押して彼女は逃げるように出て行った。なんか瑠美は気持ちが悪かった。気になることを言ったのだろうか、離婚などかなり馬鹿にした言い方だったのだろうか、自分では分らなかった。

瑠美の更衣室は、北側のエレベーター通りにある。そちらに向かって小走りした。自分だつて人と話している暇はない、シゴトシゴトと言って、薬務室の部屋に入った。朝一番のミーティングに備えて、倉庫のような部屋に風を入れた。

(九)

夕方、退庁時間間際に明間ケースワーカーからメールが入った。

「この前の喫茶店にいます、時間ありましたら寄ってください」

「了解」と返事をした。何はともあれ、彼女の反応に拘った。

この間の喫茶店は、駅のロータリーの一角、一階が薬局で、外階段を上げていく。

退庁間際に出たのか、彼女は窓際のデスクですでにコーヒーのカップを持っていた。

「私はビールにする」と言って彼女の前に座った。

「なんか、いや深刻な顔をしてどうなさったのですか」

明間は、予断のない顔をして、肩に力を入れて瑠美を迎えた。

「うん、あなたから離婚の話が出たでしょう、あれどうしたの」

「偶然でしょうが、私今離婚しようと思っているの」

「だって、あなたは何回か、離婚した人と聞いているけど、本当」

「本当よ、過去に三回している。離婚のこと職場では、話さないようにしていたんですが、知らなかった」

「知るわけじゃないでしょう、でも知っていたからって言っても、私は変わりないけど、職場は簡単じゃないでしょうね」

「どんな風にも。例えば、危ない橋を渡っているわね、

普通の職場では、危険な人とレッテルを貼られてしまう、」

「そうかもね、でも離婚がなぜ悪いのよ、なぜ」

「うん、離婚自体よりも、その周辺のこと」

「例えば、他人の夫を取ったとか、私は一度も妻のある人とは付き合っていないません」

「子供がいて、その子を置き去りにしているとか、母子家庭の手当てを貰っているとか」

「私は一番先の夫の子がいる、いま大学生で、東京に下宿しています」

「誰が育てたのですか」

「田舎の母親、岩手で薬局を開いている、から経済的には安泰だった」

「そうならいいけど、母子家庭は大変ですよ、この辺は東京の郊外と言ってもまだ田舎だから、偏見がある」

「どんな偏見、なぜ離婚した女性はマークされるの」

「それはね、ちょっと言えないけど、不良だとか」

「つまらない話、それで、私は今も普通の家庭を持っています、何にも問題はないでしょう、離婚なんか同居人を換えているようなもので、特別なことではない」

「離婚した人、後なかなか結婚しないけど、よくできたわね」

「それは、職業持っているからかもしれない、経済的に自立して、男に頼らないのが魅力かもね」

話が、変なところに行ってしまった。なんで、明間主任と話しているのか分からなくなった。

瑠美は結婚し、そして離婚するのは、決して特別な人だと、自分では思っていない。だって、人生長い期間、結婚しているのだから、十分相手と付き合っている。恋人時代のように二年で付き合いをやめたという流れではない、きちんと付き合ってきて、寝食をともにしている。相手の考えや、生きがいや、そして親友などもみんな知っているのだから、十年も夫婦をやれば大方のことが知れる。それでも普通の夫婦は、二十年、三十年と続けていく。その間に夫婦間のトラブルを抱え、何度離婚しようと思ったか分からないというのが、普通の夫婦であろう、そんなこと十分に知っている。

しかし、彼女たちは一度も離婚していない。瑠美は、なんと離婚しようと思ったか分からない、という周りの人々の声を聴くと、その時何で、離婚しないの、と思ってしまう。離婚しようとしたときに、なぜ離婚しないの、と問いた。

なぜ、離婚しないのと問うと、大体が「子供がいる

から」「家がここにあるから」そして「世間体があるから」「手続きが面倒だから」と言ってくる。そんなことで離婚しない、という言い訳はできない、離婚の手続きは、案内簡単だ、結婚よりも簡単かもしれない、離婚届け出人の印鑑と、本人の証明書、戸籍謄本があれば離婚ができる、立会人も必要でないし、一番大切なのは両人の印鑑である、片方だけが離婚したいというときには、調停離婚に持ち込むようになる。双方の合意があれば、簡単に離婚できるのだ。決して我慢することもないし年月がかかるわけでもない。その簡単な離婚をほとんどの人が毛嫌いする、それは身内の反応である。身内は、特に母親は、離婚を嫌う。傷がつくとかで。「傷がつく」傷物になってしまふことは、大変忌み嫌う。再婚もできないとか、職場でもハンディーになると言って嫌う。その批判を全部受け入れてしまえば、聞いても黙って耐えていることだ。そうすれば、相手を説得できれば、簡単に離婚ができる。

離婚成立した日から百日たてば、再婚もできる。また、好きな人と再婚すればいい。世間体が悪いなどという歯止めはそのうち聞かなくなるだろう、一時だ。そしてまた出直す、好きな人と結婚すればいいのだ。子どもがいるときだけ、親権などで、面倒になるが、

子どもがいなければ楽だ。その代り女性は男性の財産を欲しがらないことだ。

結婚の継続で傷ついたり傷つけたりすることが多い、その時は勇気をもって離婚する方が、長い人生では、いい選択だと思える。

「えてして日本は難しいことを並べる人が多いが、もうそれは一回の結婚にしがみついている人の離婚であつて、何ら新しい人との出会いを阻むものはない、元気でいればまた新しい人との出会いが待っている。

八時前に家に着いた、駅前のスーパーマーケットの総菜売り場で、夕飯のおかずはほとんど買ってしまふ、だからこの時期、サンマを何度も食べることが出来る。家で焼いていたならば、玄関まで臭つてしまふ。臭いを出す換気扇はついてはいるが、それでも結構部屋に臭みが残る。やがてそれらは室内の臭いとして積もつてゆく。臭いが出る料理はしない。いつも臭いを消す脱臭の元は各部屋に置いてある。だから家の中は、すがすがしい匂いが立ち込めている。

先日大家の未知子が訪ねてきたとき、言った言葉を瑠美は思い出してた。

「いい匂い、こんな家臭のない玄関はめずらしい。き

れいに使っていたのですね。大家冥利です」  
大沢未知子が喜んでいたので瑠美は毎日の掃除が楽しみになった。

この家なら晋也と仲良くくらせるかもしれないと思えてきた。新婚のときの彼のだらしなさが目につかなくなり、男とはこんなものだというおおらかな気持が芽生えてきた。

冬でもふとんが干せる生活は、この家に入居してはじめて手に入れたプレゼントである。

終わり

著者の近刊、長編小説『愛の領域』文芸社、2021年



文庫版